

一昨年スコタイという所へ、チェンマイからバスに乗って行きました。乗っているのは日本人は私だけで、あとは全部タイの人。観光バスじゃなく、普通のタウンバスですから、もう荷物を抱えた行商人風の人でいっぱいあります。ところが長距離バスですからバック・グラウンド・ミュージックをかけてくれるわけがあります。ほとんど全部タイの音楽や中国音楽であつたりという事で、知らない歌ばかりなんです。その中に何曲か日本の歌謡曲が出てまいります。私は音痴といわれるゆえんで、残念ながらその名前も分かりませんが、文句は全部現地語で、歌手もむろん日本人じゃありません。しかしメロディーは明らかに日本の歌謡曲であります。それを彼らが日本の歌だということを意識していない証拠には、その音楽が流れたときだれ一人として私のほうを見る人なんかいませんし、知らん顔の半兵衛です。それは、彼らが日本の歌とは考えていない証拠ではないかと思うんです。

また昨年、マラッカの郊外を歩いていましたら、全く草深き農村の汚い百姓家の中から、あんなにか聴いたことのある音楽だなど、立ち止まって聴いていますと、なんとこれは『星影のワルツ』であります。たどしうたっているのは千昌夫さんではなく、たいへんきれいな、か細い女の声でありまして、しかも文句は日本語ではありません。私はよっぽど家の中へ入って、それはどういふ歌かと聞こうと思ったんですけれど、ちょうど庭にその家の人が出てきて何か仕事を始めました。私はしばらく立ち止まって聴いてたんですが、全然こちらを見向きもしません。それが日本の歌だということをもし彼が知っていたら、「オーイ、おじさん、日本の歌をやつてよ」ぐらい言つたらうと思うんです。ですから、そのお百姓さんはおそらく、日本の歌だということは全然知らないんじゃないでしょうか。

そういうようなことを実は私の友人からも聞いたことがあります。あるキャバレーに行つて酒を飲んでいたら、言葉も、声も違ふんだけれども明らかに日本の歌を始めた。その友人は酔っぱらっていたから、ついうれしくなつちやうと楽士に「やあありがとう」と言つたら「何がありがたいんですか」って聞かれたそうです。向こうはべつに日本人だからといってサービスしたわけでも何でもなく、日本の歌とは全く意識していない。だからいきなり「やあありがとう」なんて喜ばれたのは、何を感謝してゐるんだかわけが分からん、ということだったんだらうと思うんです。つまり、私たちの知らないうちにそういう形で日本の歌というものがずいぶん出ております。これは恐らくみんな海賊版だらうと思いますが、そういうものをずいっと拾い集めてみると実にいろいろな曲が東南アジアに深く浸透しているんじゃないかと思うんです。